

Olga Fischer, Ans van Kemenade, Willem  
Koopman & Wim van der Wurff (eds.):  
*The Syntax of Early English*

Cambridge: Cambridge University Press, 2000. xviii+341pp.

---

加藤正治

---

## 1 はじめに

本書は古英語期から中英語期に生じた統語変化を文法理論と言語習得の観点から説明しようとしたものである。古英語・中英語各々の統語論の概説と豊富な用例が示され、語順の変化、不定詞構造の変遷、文法化といったテーマが扱われている。全体は九つの章で構成されている。以下、各章の内容を概観して考察を加える。

## 2 概 要

第一章は本書全体のイントロダクションに相当し、まず統語変化に対する生成文法的アプローチの基本概念が述べられ、その後、生成文法の原理・媒介変数理論 (Principles and Parameters Theory) の観点から見た文法の変化、文法の変化と言語変化、方法論と歴史的データの扱い方といった話題が続く。

第二章と第三章はそれぞれ古英語と中英語の統語論の概説で、形態論と格付与、語順、主節・従属節、前置詞残留 (preposition stranding) について述べられている。

第四章から第九章は統語変化の事例研究である。第四章では、定形動詞の位置に着目していわゆる「動詞第二位現象 (Verb-Second Phenomena)」の歴史

的变化が考察されている。著者達によれば、古英語は根文 (root sentence) のみに動詞第二位現象が観察される非対称的動詞第二位言語で、(1)の基底構造をもち、定形動詞はC位置へ上昇できると仮定されている。

- (1) [CP C [FP F [NegP Neg [TP T [VP ... V ... ]]]]]

(FP は代名詞の着地点を示す節点)

根文にみられる動詞第二位パターンは(2)のようになる。

- (2) a. Subj NP - V<sub>i</sub> ...  
 b. WH/*ne/þa* - V<sub>i</sub> - Subj ...  
 c. Topic - V<sub>i</sub> - Subj NP ...  
 d. Topic - Subj Pron - V<sub>i</sub> ... (V<sub>i</sub>=定形動詞)

(2 a)は主語がCP指定辞位置に上昇することによって得られる。V<sub>i</sub>はC位置まで上昇せずF位置で止まる。(2 b)は二つのタイプに分かれる。WHと*þa*はCP指定辞に置かれV<sub>i</sub>はC位置へ上昇する。*ne*は基底ではNegPの主要部位置に置かれ、V<sub>i</sub>のC位置への上昇の途中でV<sub>i</sub>に接語として付加される。どちらのタイプでも主語は、名詞の時にはTPの指定辞位置に、代名詞の時にはFPの指定辞位置に置かれるが、いずれにしても最終的にはV<sub>i</sub>の右側になる。(2 c, d)ではTopicはCP指定辞位置に置かれるが、(2 a)と同じくV<sub>i</sub>のC位置への上昇を引き起こさないためにV<sub>i</sub>はF位置で止まる。上述のように代名詞主語はFPの指定辞位置に、名詞主語はTP指定辞位置に置かれるので(2 c, d)にみられる語順の違いが生じる。

中英語期に入ると(2 b)の派生パターンはそのまま保持されたが、(恐らく動詞の屈折語尾の退化が原因で)V<sub>i</sub>のF位置への移動が消失したために(2 c, d)にみられた語順の違いは消失した。

第五章では、Kayne (1994)のUniversal Base Hypothesisが採用され、古英語の基底語順はSVOであると規定されている。古英語で実際にみられるSOV語順は、Chomsky (1995)等で提唱されているミニマリスト・プログラムの考え方を取り入れ、VPを支配するAgrOPの指定辞位置へ目的語が、主要部位置へ動詞が移動することにより派生されるとしている。

- (3) [AgrOP Obj V-AgrO [VP ... *t<sub>v</sub>* *t<sub>obj</sub>*]]

紙面の都合上省略するが、法助動詞を伴う文にみられる語順の多様性も基本的にこの考え方をもとに説明される。

中英語期になると動詞の AgrO への上昇が消失するようになる。目的語が AgrOP の指定辞位置へ移動するためには動詞が AgrO へ上昇する必要があるので、動詞が AgrO へ上昇しなくなると目的語も AgrOP の指定辞位置へ移動できなくなり、結果的に SVO 語順のみが派生され SOV 語順は衰退する。動詞の AgrO への上昇が消失した原因は動詞の屈折の消失に求められるかも知れないということも示唆されている。

第六章では、まず古英語の文における不変化詞 (particle) の分布について考察されている。動詞との相対的な位置関係を表わす主要なパターンは概略(4)のようにまとめられる。

(4) 主節： a. . . . V<sub>r</sub> Prt (Prt = 不変化詞)

b. . . . AUX . . . Prt V<sub>nr</sub>

(AUX = 助動詞, V<sub>nr</sub> = 非定形動詞)

従属節： c. . . . Prt V

不変化詞を含む構造については、動詞の目的語と不変化詞は(5)にあるように (AgrP で表わされる) 小節 (small clause) を形成すると仮定され、さらに不変化詞は VP の上にある PredP の主要部に移動すると仮定されている。

(5) [<sub>AgrOP</sub> AgrO [<sub>PredP</sub> Pred [<sub>VP</sub> V [<sub>AgrP</sub> Obj Agr Prt]]]]

(4 a) は主動詞が AgrOP より上に上昇し、不変化詞が Pred 位置へ移動することによって派生される。この場合、目的語の位置は不変化詞の前と後どちらも可能であるが、それは目的語が AgrOP 指定辞位置に顕在的に移動するか否かによって決まる。主節に助動詞が含まれる場合には主動詞は移動せず不変化詞だけが移動するので (4 b) が派生される。従属節では助動詞の有無に関わらず主動詞は移動せず不変化詞だけが移動するので (4 c) が派生される。( (4 b) と (4 c) に生じる目的語の位置については何も説明されていない。) 中英語期には不変化詞は Pred 位置へ移動しなくなり(5)の構造がそのまま出てくる。

第七章では①“(for) NP to V”構造と②「対格+不定詞 (accusative and infinitive (AcI))」構造の発達について述べられている。①の起源となる構造は

“(for) NP [Obj V<sub>inf</sub>]”で(for) NP は受益者, Obj は V<sub>inf</sub> の目的語であった。中英語期に基本語順が SOV から SVO に変化したのに伴い“(for) NP [V<sub>inf</sub> Obj]”へと変化し, 更に類推により(for) NP が不定詞の主語として機能するようになった。②の起源となる構造は“V [PRO<sub>arb</sub> Obj V<sub>inf</sub>]”で PRO<sub>arb</sub> は V<sub>inf</sub> の主語, Obj は V<sub>inf</sub> の目的語であった。その後, 中英語期に SVO 語順の確立, 格を表わす屈折語尾の衰退, 受動不定詞の導入などが原因となって Obj が不定詞の主語として認識されるようになり, 現在の用法が確立した。

第八章は“easy-to-please”構文, いわゆる Tough 構文の発達に関する論述である。古英語期にはこの構文に前置詞残留の現象がみられないことから, 不定詞内の空所は NP 移動によって生じたものであり, (6)のような構造が想定されている。

(6) NP<sub>i</sub> be Adj [<sub>IP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> to V t<sub>i</sub>]]

中英語期になるとこの構文に前置詞残留が生じるようになったために, (7)のような空の演算子 OP の WH 移動による派生も想定され, 二種類の構造があったとされている。

(7) NP<sub>i</sub> be Adj [<sub>CP</sub> OP<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> PRO [<sub>VP</sub> to V NP P t<sub>i</sub>]]]

第九章では文法化の事例として半助動詞 (semi-auxiliary) have to の発達と文否定の変遷が述べられている。半助動詞 have to の起源は従来の方と同じく“have NP to V<sub>inf</sub>”と設定されている (NP は have の目的語, 不定詞は NP に付加された付加詞)。後期中英語期になると不定詞は NP に付いた関係詞節と見做されるようになり (have [<sub>NP</sub> NP [<sub>CP</sub> OP<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> PRO to V t<sub>i</sub>]]]), NP は have の目的語と不定詞の目的語のどちらにも解釈されるようになる。この後者の解釈に SVO 語順の固定が結びついて“have to V<sub>inf</sub> NP”の語順が生じ, さらにそれによって have が助動詞的性質を持つようになったとされている。

文否定の変遷については, Jespersen (1917) の「否定のサイクル (negative cycle)」が受け入れられている。第一段階「単一の否定標識による否定」は否定辞 no を用いた古英語の最も初期の構造 [<sub>CP</sub> no C [... V<sub>f</sub> ...]] が起源で, 次に no から ne への文法化と V<sub>f</sub> の C 位置への移動が起こり ([<sub>CP</sub> ne [<sub>C</sub> V<sub>f</sub>] [... t ...]]), さらに ne は接語化し NegP の主要部を占める要素となる。否定の力が

弱化した *ne* を補強するかたちで第二の否定要素 *na/no* が NegP の指定辞位置に導入され ( $[_{CP} [_C \text{ ne+V}_f] [\dots [_{\text{NegP}} \text{ na/no } t] \dots]]$ ), 第二段階「否定標識+否定副詞/名詞句による否定」を迎える。中英語期になると *na/no* にかわって *not*, *noht* などが用いられ, *ne* は弱化がさらに進み消失し始める。これが第三段階「第二の否定要素だけで否定が表わされ, もともとの否定標識は随意的になる」で, さらに中英語期の終わりには *ne* はほぼ完全に消失し第四段階「もともとの否定標識が消失する」が完成する。

### 3 コメント

紙面の都合上細かい問題点を指摘する余裕がないので, 構造分析に関わる問題点の指摘にとどめる。全体を通して最も気になったのは, 要素の移動の有無に関して十分な説明がなされていない点である。例えば, (2 a, c, d)において C 位置に V 移動しない理由, (4 c)において V 移動が起こらない理由, *no* を用いた否定文で C 位置に V 移動しない理由が説明されていない。説明不足の所為で分析が中途半端であるかのような印象を与えている。また, ミニマリスト・プログラムの考えを用いた構造分析がなされている箇所において, その用い方がいかにも断片的で, 言ってみれば著者たちの主張にとって都合の良い部分だけを取り込んでいるかたちになっているところも問題である。著者達の想定する理論的枠組の中にミニマリスト・プログラムがどのように組み込まれるのかが明らかにされていない。折角最新の文法理論を取り入れていながらそれを十分に活かしきれていない点が残念である。

### 4 結 語

豊富なデータが示されているので英語史の研究を志す者にとって大変有用な入門書である。特に生成文法の考え方を歴史変化の説明に応用しようとするものにとって, 第四章~第六章は大いに参考になる。例えば, van Kemenade (1987) では古英語の動詞第二位現象と人称代名詞の分布に関して不完全な説

明がなされているが、本書ではミニマリスト・プログラムの考えと FP 節点を導入することでその不完全さがかなり解消されている。上述のような不備な点もみられるが、本書全体の価値はそれらを補って十分余りあるものだと言えよう。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and other Languages*. Det Kgl. Danske Videnskabernes Selskab. Historisk-filologiske Meddelelser 1. 1-151. Copenhagen.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kemenade, Ans van. 1987. *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht: Foris.